

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
住所: 川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話: 044-988-0004 (柿生中学校)
<http://www.kakio-kyodo.com>
第51号

柿生文化に寄せて

校長 土屋 徹
(柿生郷土史料館館長)



この4月に臨港中学校から着任しました校長の土屋と申します。柿生地区とは縁があり、平成4年からの8年間を柿生中学校から分離独立した白鳥中学校で勤務させていただきました。着任当時の白鳥中は、東は新百合ヶ丘駅近くから西は黒川地区までと、学区域の面積では市内では有数の広さを誇っていました。それでも、全校で10学級の小規模校だったのは、開発がまだまだ進んでいなかったためでした。

白鳥中を去って12年、地域の変化の大きさに驚いています。小田急多摩線には、新駅として「はるひ野駅」が誕生し、黒川一帯が大きく変貌いたしました。また、五力田や麻生川流域の水田地帯も宅地化が進み人口が急増してきました。

このように、地域の変貌が激しい時代となってきましたが、昨年3月の東日本大震災を機に、地域の絆を見直そうとする機運が各地に広がってきました。その意味でも、この柿生郷土史料館を中心にした地域のまとまりは、意義深いものだと思います。

「温故知新」～故きを温ねて新しきを知る～という言葉がありますが、これからの柿生中学校の姿を見据えるためにも、柿生地区の歴史的な歩みを理解することは大きな力になると思います。その意味からも、柿生郷土史料館の活動を支えていきたいと考えています。

再開しました

シリーズ 「麻生の歴史を探る」

第21話

～万葉時代の故郷に想いをめぐらせて～

小島 一也

私はこの夏、足柄峠に行くことができました。

万葉集防人の歌（武蔵国都筑郡に住んでいた夫婦）

（夫）行き息づくしかば足柄の峰延ほ雲を見とと偲【しの】はね

服部於由

（妻）わが背なを筑紫へ遣りて愛しみ帯はとかななあやにかも寝も

妻皆女

この歌は心ならずも召集に応じて遠く筑紫へ赴く防人が、足柄峠に流れる雲を目にして故郷に残してきた妻を気遣い、妻は足柄峠に送り出した夫への想いの歌ですが、私どもの麻生区からは足柄峠は良く見え、私の胸にはいつも”峰延ふ雲“が去来していました。

足柄峠は養老2年(718)、大宝律令で都と地方を結ぶ官道(古東海道)として設けられたもので、古くは日本武尊の御東征の道(ヤマトタケルミチ)ともいわれ、奈良時代には貧しい東国の農民から貢物が奈良・京都へと運ばれたところ。また、立野、石川、小山田などの牧からは、育てた駿馬が都へ引かれていった峠。いつか行って見たいと思っていた所でした。

足柄道は何度も富士山の噴火に見舞われ、宝永4年(1707)の大噴火は峠を封じてしまったこともあるようです。江戸時代には矢倉沢往還(大山道)と呼ばれましたが、今は地方道御殿場大井松田線。行ってみると忘れ去られた閑散とした峠道でした。それはその筈。東海道は箱根に移り、山北の都夫良野トンネルは国道246号線を、そして並行して走る東名高速道は物流の大動脈となっているのですから。

往古を探る峠道は”関本”から始まっています。ここにはその名の通り官道を偲ばず関所跡があり、足柄山の金太郎(源頼満四天王、坂田金時)の史跡を巡るハイキングコースの起点になっています。

峠の茶屋はタツタの1軒。店は綺麗だがお客は居ず、大きな樹木の陰に天慶の乱(939)で関東を制覇した平将門が東国の守りとした関所跡があり、案内板には日本最古の関所だったと記されていました。

峠(標高759m)の静岡県側は室町時代、関東に進出した北条早雲が足柄城を築いたとされる所ですが、神奈川県側は整備されて万葉公園になっています。万葉歌碑が7基。その中に都筑の防人の歌碑もありました。見晴らすと左に金時山(1213m)、右に矢倉岳(780m)、そして正面には富士山、遮るもののない山麗は遠く駿河湾に続き、武蔵国の山野とは別天地の趣を見せています。

古来、万葉の昔からこの足柄峠を、どれほどの人が、どんな思いで越えていったのでしょうか。金時山への峠の辻には、「新羅三郎義光吹笙の石」というのがありました。これは後三年の役(1083)に出陣した兄の八幡太郎義家を援けるため足柄峠に来た笛の名手義光が、名月を賞で、死を覚悟して弟子に秘曲を伝授したとの故事によるもので、忘れ去られ捨てられた足柄峠の道を今に蘇らせてくれています。



足柄峠にて筆者

昔、柿生で行われた雨乞いの神事とは

川崎市北部の丘陵地帯では、梅雨が明けた7月から8月にかけて全く雨の降らない年がよくあったそうです。そうすると村全体の重大な問題となるので、村民が一致して心を合わせて大山の阿夫利【あぶり=あめふり】神社に詣でることになります。村では「代参【だいさん=村人の代表になって寺社へお参りに行く人】」が大山神社へ行き、お参りをして、霊水を竹筒に入れて村に持ち帰ります。その時、運ぶ途中で止まると、止まった地点に雨が降ってしまうので、一切休まずに戻ってこなければいけなかったそうです。



大山の神水をいただく二重神社

しかしこの習俗は昭和20年代頃にはなくなってしまったそうです。

昭和63年の川崎市の調査報告書を見ると、柿生では比較的わき水などの多かった古沢や黒川、王禅寺などでは雨乞い神事の体験者が少ないようですが、下麻生・上麻生ではこんな話が寄せられていました。

下麻生では、現在の柿生中学校の近くを流れる谷川や二つの溜池に水路を設け、用水としていましたが、日照りが続くと畑は水不足でオカボ(畑地に栽培するイネで水稲より品質が劣る)の穂が出ないこともありました。夜、ひそかに水門を開けたりして小さな水争いがよく起きました。さらに日照りが続くと、村人が相談し合って大山への代参者を二人選び、はだし足袋【=はだしたび=



大山参りをする者は川でケガレを祓った

地下足袋)、ももひき、はらがけ、半纏姿で大山まで10里(約40km)の道を歩き、そして大山でご神水をいただきます。帰り道は途中で休むとその地に雨が降り自分の村には降らないという言い伝えを信じながら、絶対に休まず下麻生への道を急いだそうです。村では村人が月読神社に集まって待っていて、いただいてきたお札と神水を神社に供え、村の長老を中心にして『雨を降らせたまえ』と唱え祈祷しました。雨が降るとおしめり正月といって一日から二日にかけて仕事を休んだそうです。

一方、上麻生では、代参が帰ってくると、いただいてきた神水をシメ縄を張った竹にかけるとそれを合図にして『サングサング 六コンショウジョウ』と唱えながら水を掛け合ったそうです。その後、雨が降ると『おしめり正月しなくては』と話しあっていたそうです。

また、上麻生の仲村では、区長さんの家の庭で青竹を中心にして稲藁で直径20cm、長さ3間(約5.5m)くらいの胴体でヒゲと目がしっかり付いている竜を作り、それを麻生川に入れ、『六コンショウジョウ 雨を降らせたまえ』と言って水を掛け合いました。やがて竜が浮き上がってくると雨が降ると言われていました。不思議なことに雨乞いをするると本当に雨が降ることが多かったそうです。



雨乞いの竜

(文:板倉)

(参考資料:「川崎市博物館資料調査報告書—昭和63年3月—」)

郷土の歳時記

8月 葉月=読みはづき=意味本来、旧暦の8月で現在では9月にあたります。一般的には木の葉が紅葉して落ちるという意味です。

◎立秋【りっしゅう】=8月8日

- ・暦の上で秋の始まる日ですから秋の気配が出てくる頃です。昔の本には「初めて秋の気立つゆえなれば」と説明しています。
- ・この日からは暑中見舞いではなく「残暑見舞い」となります。

◎お盆(旧盆)=8月15日

- ・迎え火【むかえび】=13日:故人が家に帰ってくる日で、火を焚いて先祖の霊を迎えます。
- ・送り火【おくりび】=16日:先祖の霊が帰る日です。

◎処暑【しよしょ】=8月23日

- ・昔から二百十日とともに台風の襲来が多い日とも言われています。暑さが峠を越えて後退し始めるころです。昔の本には「陽気とどまりて、はじめて退きやまむ」と書かれています。



迎え火

⇨⇨ 柿生郷土史料館開館日のご案内 ⇨⇨⇨⇨⇨⇨⇨⇨⇨⇨

- ◎開館日:偶数月は土曜日、奇数月は日曜日
- ◎開館時間 午前10時～午後3時
- 8月4, 11, 18, 25日(毎土曜日)
- 9月2, 9, 16, 30日(毎日曜日) 9月30日はカルチャーセミナー開催(午後)

⇨⇨ 柿生郷土史料館開館日8～11月の催物 ⇨⇨⇨⇨⇨⇨⇨⇨⇨⇨

第6回特別企画展

- ◎テーマ 『写真でたどる郷土百年の歩み展Ⅱ ～昭和20年より今日まで』
- ◎期 間:8月18日～11月25日
- ◎特別展示 写し出された132年前の下麻生の姿も展示しています。

第37回カルチャーセミナー

- ◎テーマ 64年前の空中写真がとらえた歴史の足跡
～先端技術が解析する郷土の遺跡と自然～
- ◎講 師 朝倉一貴氏 (國學院大学大学院博士課程)
- ◎日 時 9月30日(日) 13:30より
- ◎会 場 柿生郷土資料館
- ◎内 容 終戦直後のアメリカ軍の高精細空中写真を先端技術で解析し、郷土の古代～近世の遺跡や過去の自然の姿を探索する。